

第3回アリーナ基本計画検討委員会 議事概要

〈開催概要〉

日 時：令和8年5月21日（木）14時00分～16時00分

場 所：徳島県庁7階 707会議室

出席委員：山中委員長、千葉委員、信江委員、長井委員、牛尾委員、臼木委員、
相原委員、里委員、吉長委員

〈会議次第〉

1 開会

2 議題

（1）アリーナに関する意見交換

3 閉会

〈配布資料〉

資料1 第3回アリーナ基本計画検討委員会 資料

資料2 第3回アリーナ基本計画検討委員会 参考資料

〈議事概要〉

（山中委員長）

次の予定の関係で里委員が 14 時 15 分に退出予定のため、ご意見を先にお伺いします。

（里委員）

一つ目として、にぎわいづくりのキーワードである「にぎわい」については、尺度や目安となる明確な定義が必要です。どの程度の状態を「にぎわい」とするかについては、皆さんの認識に差があると思います。例えば、徳島駅前に人が歩いている程度を指すのか、周辺のカフェの経営が成り立つほどの人流を想定するのか、求めるものが異なると議論が難しくなります。

二つ目に、仮に既存のアスティとくしまだけで安定的にバスケットボールの試合を開催できるかを考えると、アスティとくしまだけでは対応が困難です。規模や日程の重複など、一つの施設だけでは十分ではありません。しかし、5,000～6,000 人を超える規模の施設となると、試合がない日の利用方法（展示会や会議など）のバッチングが懸念されます。

アスティとくしまにはなく、新アリーナに備わる機能としては、やはりスポーツが挙げられると思います。その場合、メインアリーナとサブアリーナをどのように活用し、プロとアマチュアでどのように使い分けていくかについても、今後議論が必要だと感じています。

（事務局）

参考資料の中で長井委員のご意見としても紹介されていますが、まちづくりやにぎわいづくりについて、徳島県としてどのような方向性を目指すのかは非常に重要な課題だと考えています。尺度の定義は難しいものの、県都のグランドデザイン（令和 5 年 11 月作成）では、駅周辺を中心に、周辺地域の施設も含めて地域全体の魅力を高め、人々が集まりにぎわう県都のまちづくりの姿を描いています。その中で、駅前から少し離れた場所では、県庁付近の万代中央ふ頭の倉庫群でのにぎわいづくりや、スポーツ施設が入っている県立東部防災館も含め、交流人口の拡大や中心市街地の活性化など、新たなにぎわい創出の拠点としてアリーナを位置付けています。課題はありますが、交流人口の増加や新たなにぎわいの創出という観点から、どの程度までの「にぎわい」を目指すのかについては、今後委員の皆様のご意見をいただきながら進めていきたいと考えています。

また、アスティとくしまとの役割分担も重要な論点です。前回の会議では、徳島ガンバロウズの試合をアスティとくしまで開催する場合は 3,500 席の設定という臼木委員からのご発言もありました。コンサートについては、ステージの配置や観客席、音響、照明の関係もありますが、3,000～5,000 席での開催実績もあります。

アリーナの規模については、これまでの議論の中で、アスティとくしまよりやや大きいコンサート開催や、B.LEAGUE PREMIER 基準を満たすスポーツ仕様とする方向性が示されています。機能や用途の区別化が課題であり、トップスポーツチームの試合が年間 60 日程度開催される一方で、残りの約 300 日をどのように活用するか、アスティとくしまとの役割分担を明確にし、相乗効果を図ることが重要だと考えています。今後も委員の皆様からご意見をいただきながら、検討を進めてまいります。

（山中委員長）

にぎわいの定義は難しいものです。多くの場合で、周辺を歩いている人数等をにぎわいの指標としていることが多いが、それらの人々は共同体験をしていません。一方、スポーツの場合は、観客が同じものを見て同じように興奮するなど、共同体験が生まれます。そうした状況を踏まえると、7～8割の満席状態をつくることが基本であり、そのような規模感に設定することが重要だと理解しています。共同体験が実現できれば、にぎわいも生まれてくると考えますので、その点について整理が必要です。

また、アスティとくしまとの違いとして、スポーツがキーワードとなっていることが大きな特徴です。スポーツの機能については、しっかりと整備していただきたいと考えています。

（事務局）

資料、参考資料について説明（省略）

（山中委員長）

本日は引き続き、各項目について議論を深めることで、事務局による「基本フレーム案」の取りまとめにつなげていきたいと考えていますので、よろしくお願いいたします。

まず、資料1ページの「1 目的・役割」についてです。「にぎわい創出、魅力発信、地域活性化のプラットフォーム」や「地域の防災機能を強化する拠点施設」といった公的な役割について、方向性が見えてきているところです。

次に、「2 規模・機能」についてです。これまでの検討委員会での議論を踏まえると、県アリーナに整備すべき規模・機能については、「感動を共有する」アリーナとして5,000席が必須条件であると理解しています。上限については7,000席程度が適当ではないかというご意見が多かったです。また、プロスポーツの試合をはじめ、トップレベルのエンターテインメント空間の創造が必要であり、エンターテインメントにはコンサート等も含まれると認識しています。さらに、メインアリーナやサブアリーナの活用による「するスポーツ」の拠点化や、大規模大会の開催が可能となるスポーツ機能の充実も重要な要素です。これらが、皆様のご意見から見えてきた方向性です。

「にぎわい」とは何か、また社会課題の解決にどのように寄与し、地域社会の共創や豊かなコミュニティ形成をどのように解釈するかなど、ご意見やご質問があればお聞かせください。

なお、前回ご欠席された長井委員の参考資料もご置きます。事務局とのオンライン協議時の議事要旨をまとめており、エンターテインメントの観点から、四国における「スポーツ＋ヘルスケア・ハブ」の創設などのご提案もいただいています。

（長井委員）

原理原則の原点に立ち返り、改めて「にぎわい」とは何かについて考えています。365日24時間にぎわいがある状態とはどのようなイメージか、その要素を分解し、具体的に分析することがまだ十分にできていないと感じています。

検討委員会のメンバーには、県内在住者だけでなく他府県の方もおり、さまざまな立場の違いがあります。カスタマージャーニーという考え方がありますが、そこに集う人々の年齢、性別、職業、家族構成などを分析し、来訪者が何を目的に訪れるのか、1日をどのように楽しみ、どのような思い出をつくるのかといったイメージを掘り下げていくことが重要だと考えています。そのイメージを言語化し、共有するプロセスが必要

です。この作業を検討会や分科会、あるいは事務局で進めていくことも検討していただきたいと思います。

また、徳島県内の他の施設との連携については、徳島県の地の利も踏まえ、県内はもちろん、四国全体における「スポーツ＋ヘルスケア・ハブ」の創設を目指すという方向性が有効だと考えます。ハード面だけでなく、ソフト（コンテンツ）の内容や提供方法によって、多くの方が持続的・継続的に訪れる仕組みをつくることが重要です。これは、社会課題の一つである健康寿命の延伸、すなわち県民の健康寿命の向上にもつながる可能性があります。

そのための施設のあり方としては、スポーツやヘルスケアに関わる機能が集積した施設とし、医学部を有する徳島大学や専門学校との連携も考えられます。ハブとなる要素をさらに深掘りし、イメージを具体化していくことで、施設のあり方が見えてくるのではないかと考えています。

（山中委員長）

ありがとうございます。スポーツ、ヘルスケアを中心にハブ化していくというアイデアをいただきました。

（千葉委員）

にぎわい創出や魅力発信、地域活性化のプラットフォームなどが挙げられていますが、プラットフォーム＝ハコ物を整備すれば人が集まるというわけではありません。施設を建設しても、内容が伴わなければ誰も訪れないため、ソフト面で何を提供していくかが重要です。

先行して B.LEAGUE 関連のアリーナが都市部や地方都市を含めて全国各地に整備されていますが、常時にぎわっている施設とそうでない施設の差が顕著になっています。B.LEAGUE は重要なコンテンツですが、それだけで 5,000 人規模のアリーナの週末（年間約 52 週）を埋めることは難しい状況です。自らのコンテンツを磨き上げていくことが非常に重要だと考えています。

にぎわい創出については、徳島県の駅前のような既存のにぎわいとは別に、新たなにぎわいを生み出すことが求められます。現状のにぎわいの延長では、若い世代の県外流出という社会課題の解決にはつながりません。新しいにぎわいやコンテンツを創出することが非常に重要であり、アリーナがそのような場所として必要だったと、後から評価されるような施設を目指すべきだと考えています。

6,000 人規模の長崎スタジアムシティ HAPPINESS ARENA では、B.LEAGUE CHAMPIONSHIP 2025-26 が開催され、県や市全体で盛り上がっている状況です。バスケットボールというコンテンツを地域で育て、人気コンテンツにしていくことは間違いではないと感じています。

新たなコンテンツとして、ライブエンターテインメントが挙げられます。あなぶきアリーナ香川では 8,000～1 万人規模のイベントが開催されています。アリーナツアーには最低でも 8,000 人規模が必要とされていますが、全国に 1 万人規模のアリーナを整備すれば集客できるかというと、必ずしも容易ではありません。長崎は九州でも福岡から距離があるエリアですが、エンターテインメント利用は比較的多い状況です。一方、同じ 6,000 人規模でもバスケットボールでは満席になるものの、エンターテインメント利用がほとんどないアリーナも存在します。この違いは立地条件だけでなく、「選ばれるアリーナ」になっているかどうかが大きな要因です。

例えば、1 万人規模のライブエンターテインメントでは、約 20 台のトラック運送が必要となり、そのコストを回収するためには 1 万人分のチケット販売が不可欠です。5,000 人規模では採算が取れない場合もありますが、必要最小限のライブ設備環境（B.LEAGUE との兼用も可能）を整えることで、Zepp のよ

うに 5,000 人規模でも採算が取れる施設となります。このような環境を備えたアリーナであれば、エンターテインメントコンテンツにも利用されやすくなります。将来的には、設計計画や発注要件の段階からこうした要素を組み込んでおくべきだと考えています。

（長井委員）

1 万人規模以上のコンサートと 5,000 人規模のコンサートは、全く性質が異なり、同軸で議論することはできません。新アリーナについては、1 万人以上の規模で整備すると経費倒れになると考えています。そのため、5,000～7,000 人規模とし、コンサートのキャパシティも 5,000 席程度が適切だと思います。

また、設備環境については、演者の経費負担を軽減することがエンターテインメント利用の最低条件であると感じています。アスティとくしまとの役割分担については、別途議論が必要です。

（山中委員長）

レベルは違うということで、理解しました。

（山中委員長）

「2 規模・機能」の話が中心となっておりますので、「1 目的・役割」についていかがでしょうか。

ここは決してショッピングセンターを整備する場所ではないと認識しています。スポーツショップなどの物販も一部は想定されますが、主な目的は物販ではなく、スポーツと連動した体験型の施設であるべきだと考えています。多くの方が共同でさまざまな体験ができる場所とすることが、キーコンセプトになると考えます。その結果、来場者が一体となってにぎわいを感じられるような施設をイメージしています。

（臼木委員）

バスケットボールやコンサートの開催日数を考慮すると、休日のにぎわいは比較的イメージしやすいと思います。年間の休日が約 100 日とすると、残りの平日約 260 日をどのように活用し、にぎわいを創出するかが課題です。100 日の休日に特化し、平日のにぎわいは重視しないという考え方もありますが、地域の拠点として日常的に利用してもらうためには、どの程度の規模が適切か、平日の使い方に焦点を当てて議論することも重要だと考えます。

現時点では、平日の利用イメージが明確ではありません。客層を想定すると、日中と夜間で利用者を分けて考えることも一つの方法です。日中は親子連れや高齢者の利用が想定されます。

（山中委員長）

ヘルスケアの利用者イメージとしては、必ずしも多くはないかもしれませんが、時間的に余裕のある高齢者の方々が中心になると考えています。一種の体験型の場所として利用されることが想定されます。

「にぎわい」と聞くとショッピングセンターのようなイメージがありますが、近隣に大型商業施設があるため、競合する必要はないと考えます。むしろ、異なる価値を持つ場所をつくるのが適切ではないかと感じています。

また、夕方には学校や企業を巻き込む活用も考えられます。例えば、現在部活動の地域スポーツへの転換が進められており、その受け皿としての役割も期待できます。場合によっては、県外からの合宿利用も想定でき、指導者を含めた合宿や宿泊施設としての用途も生まれる可能性があります。

(臼木委員)

合宿ニーズはあると思います。

(長井委員)

ハコを先に整備し、その後でどのように活用するかを議論するという考え方には共感できません。まず目的を明確にし、「何を実現したいのか」という視点から施設整備を進めることが順当だと考えています。

平日のにぎわいについても、通りすがりの方が利用するわけではなく、主に地元の方々が対象となります。したがって、地元住民のニーズは何か、どのような課題を解決するために施設を整備するのかという論理構成が必要ではないかと考えます。

(信江委員)

アリーナの規模については、例えば徳島ガンバロウズの試合に必要な規模や、コンサートを開催する場合に必要な収容人数などを踏まえて決めていくことになると思います。また、アリーナで試合やコンサートなどが行われていない時には、貸館としての利用が想定されるため、貸館機能をどこまで高めるかについても検討が必要です。

さらに、アリーナ以外の残りの敷地については、「予定地全体を活用したアリーナパーク」とすることも選択肢の一つです。エリア全体をどのように魅力的な場所にするかが重要であり、施設の規模や立地、仕様を決める前に、この施設で何を実現したいのかという目的を明確にすることが大切だと考えます。まずは、何を実現したいのかという共通の目的を定める必要があると、これまでの議論を通じて感じています。

「にぎわい」を具体的に考える際には、年間でどれくらいの規模の人を集めるのかという KPI（重要業績評価指標）を設定することが必要です。例えば、年間 100 万人、150 万人、200 万人といった目標人数を定め、その目標実現するために、どのような役割や機能を持たせるのかを検討していくことになります。

日本各地には、居心地の良い公共空間をつくり、交流拠点として多くの人を集めている事例が数多くあります。そうした事例を単に模倣するのではなく、参考事例として調査・分析し、徳島のアリーナ構想に活かしていくことが重要です。

例えば、富山県富山市の富岩運河環水公園は年間約 150 万人ほど集客していると言われています。どのように人を集めているのか、どのようなイベントが行われ、日常的にどのような利用がなされているのか、具体的な事例として参考になると思います。

また、滋賀県で最も観光客を集めるう コリーナ近江八幡（たねやグループの旗艦施設）は年間 300 万人以上の来訪者があると言われています。なぜこれほど多くの人が集まるのかを分析することは、交流拠点のあり方を考えるうえで参考になります。

こうした具体例をもとに、関係者が共通認識を持ち、目指すべき交流拠点としての具体的なビジョンを持つことが必要だと考えます。

商業施設を新たに作っても意味がないというご意見は、近くに大型商業施設があるため確かにその通りだと思います。しかし、大阪の天王寺エリアにある「てんしば」は、商業施設が集積する中にありながら、Park-PFI を活用し、体験型施設や飲食・物販機能を取り入れた公園として整備することで、さらに多くの人でにぎわうまちづくりが実現しています。このように、商業機能を単純に一括りにして捉えるのではなく、

集客機能をより細かくカテゴリー分けしたうえで、その地域に足りないものは何かを見極め、それを補うことで、より魅力あるエリアにしていけることが重要です。

徳島の方々や、徳島県を訪れる人々にとって、何があればより多くの人が訪れるのか、県外に出た若者が戻ってきたいと思うのか、あるいは地元に住み続けたいと思うのかを考える必要があります。そのために徳島に何が足りないのかをしっかりと見極め、アリーナとその余剰地で何を実現するのかを検討していくことが大切だと考えます。

（山中委員長）

我々の分析では、来場者数だけで議論しても、徳島ではなかなか厳しい面が多いです。単純に人数を増やすだけでは十分ではなく、むしろ滞在時間を延ばさなければ、現地でさまざまな売上につながりにくいという課題があります。現在、眉山の計画を進めていますが、40 万人が訪れているものの、平均滞在時間が 15 分程度と非常に短い状況です。そのため、滞在時間を延ばすという観点から、体験型の要素は非常に重要だと考えています。ぜひ、そのような体験をこの施設の中にうまく組み入れていただきたいと思います。

（長井委員）

建設予定地を拝見しましたが、そこは通りすがりの人が立ち寄るような場所ではありません。確実に目的を設定しない限り、そこに人が集まることはないと思います。目的があれば訪れてくれても、無目的で人が来るということは絶対にはないエリアです。それは非常に明確なことだと思います。そのため、目的をしっかりと設定する必要があります。よく「旗を立てる」と表現しますが、例えば四国の中でこれまで存在しなかったような、スポーツやヘルスケアの殿堂となる施設を設けるというのも一つの方法です。これは必ずしも高齢者だけを対象とするものではなく、若い世代、例えばサッカーやその他のスポーツをする小・中学生などもリハビリやスポーツ医療の最先端に触れることができるような、そうした明確な目的を作ることが重要だと考えます。

（信江委員）

目的について、第 2 回で申し上げた通り、郊外立地というのは「目的立地」だと考えています。街中の場合は、「何か面白いものがないかな」と思って人が集まり、そこで新たな目的を見つけることができますが、郊外の場合は、明確な目的がある人しか訪れない傾向があります。商業施設も同様で、郊外の場合、何かを買いたい、見たいという目的があって初めて人が足を運びます。一方、街の中心部では、特に買いたいものがなくても、つい立ち寄って買い物をしてしまう、そうした魅力があるのが「まち」の特徴です。

このように、郊外と街中では大きな違いがあり、郊外では「足りないものは何か」「ここで何を実現するのか」といった目的を明確にすることが重要だと思います。目的が定まらないまま議論を進めしまうと、話が散漫になり、最終的に「多目的広場をつくりましょう」といった曖昧な結論になりがちです。私は「多目的」というのは、しばしば「無目的」と同義だと考えています。目的が決まらないから「多目的」と言ってしまうのです。しっかりと目的を決めることが大切です。「あれもこれもそれも良い」というのではなく、必ずしも 1 つに絞る必要はありませんが、せめて 5 つ程度に絞り込むことが重要ではないかと考えます。

(千葉委員)

よく混同されがちなのが、アリーナの平日利用についてです。平日利用というと、学校などの拠点として使うことが想定されますが、それは本来の目的とは少しズレていると思います。市の施設や市民に寄り添った公共施設、例えば学校や公民館、コミュニティセンターなどはすでに数多く存在しています。そうした既存施設の機能をアリーナに取り込んでも、意味がないと私は考えています。アリーナで新たなにぎわいを生み出すためには、目的を明確にし、既存施設の機能を安易に取り入れないことが重要です。一見簡単なように思えても、実際に新しい利用者がライフスタイルとしてアリーナを利用してくれるかという点、そうではないのではないかと思います。

アリーナは重要な施設ですが、従来のアリーナでは滞在時間が非常に短いのが現状です。多くの場合、試合開始の30分～1時間前に来場し、試合が終わるとすぐに帰ってしまいます。そこで、アリーナとパークを組み合わせ、1日がかりのイベントにするという手法が増えてきています。こうした新しい体験価値が市民に提供されていることから、ここに必要なものは何かを考えるべきだと思います。既存の機能をアリーナに取り入れてしまうと、全くミスマッチな施設ができてしまい、アスティとくしまなど他の施設との棲み分けが難しくなります。アリーナの役割や目的を明確に意識して設計することが重要だと考えます。

(相原委員)

やはり、ここはスポーツができる場所であってほしいと思います。そして、プロスポーツ・ライブエンターテインメントとスポーツができるアリーナの二本柱で考えます。平日に関しては、現在スポーツ活動は地域に移行している傾向です。そうした地域の方々が利用でき、体験の場としても活用できるような仕組みがあれば、学校の利用も含め、高齢者や家族連れも利用できるのではないかと思います。

(牛尾委員)

千葉委員のご意見に同意します。既存の施設の機能を新しいアリーナに取り込んでしまうと、ハレーションが生じるのではないかと感じています。アスティとくしまもありますし、鳴門・大塚スポーツパーク内にも競技場がありますので、そうした既存施設とのバランスを考えることが重要です。

まずは、何を目的とするのかを明確にした上で事業を進めなければ、赤字や失敗につながる恐れがあります。そのためにも、新アリーナで何を実現したいのかをはっきりさせることが必要だと考えます。

(山中委員長)

予定地の活用については、1点目の論点「予定地全体を活用した「アリーナパーク」とするべきではないか」は、アリーナという大規模な空間を整備した場合に、その活用方法、特に試合やコンサート等のイベントがない時にどのように活用するかという点です。

2点目の論点「主催者・来場者に選ばれるアリーナとするべき」は、アリーナ周辺に何を整備するかという点です。今回の予定地を活用するという観点から、周辺整備についての議論が必要です。また、駐車場の必要台数についても、この議論の中に含まれます。

さらに、「パーク」と称するものの実態、すなわち半日から1日を通してこの場所で楽しく過ごせるとはどういうことか、という点が3点目の論点「近隣大型商業施設との連携によるにぎわい創出が必要」となりますが、これは非常に悩ましい課題であり、私自身もまだ明確な答えを持ち合わせていません。

(長井委員)

「パーク」という言葉については、信江委員のご提案かと思いますが、私個人としても好ましい表現だと感じています。議論のたたき台として考えるのであれば、「スポーツパーク」という呼び方が適切ではないかと思います。

東京都世田谷区には、砧公園や駒沢オリンピック公園等があります。これらの公園には、ユーティリティスペース、すなわち自由に過ごせる空間があり、例えば3×3のバスケットコートや、駒沢公園では都立公園としてスケートボード用のバンクが設置されている例もあります。こうした場所では、平日・休日を問わず、夕方になると若い人たちが集まり、試合や練習を行う様子が見受けられます。大規模なイベントを開催するには駐車場が必要となりますが、駐車場スペースは日常的には空いてしまうことが多いです。したがって、例えば3×3のコートやバンクなどを設置し、ユーティリティ的な使い方ができる「パーク」とするのが、新アリーナにはふさわしいのではないかと、現地でもお話ししたと記憶しています。そのようなイメージを持っています。

また、「win-win」や「にぎわい」といった言葉については、定義が曖昧であると感じています。「win-win」と言うと、逆に負ける人がいるのかという疑問も生じます。こうした曖昧な表現はできるだけ排除し、皆さんで共通のイメージを持てるよう、言葉化していくことが重要ではないかと考えます。

(山中委員長)

スポーツパークのイメージと、ヘルスケアがリンクするということで理解しました。

(臼木委員)

UZU PARK (ウズパーク) の利用はどれくらいですか。

(事務局)

子どもたちの練習場所としてスケートボード利用が多いと思います。

鳴門ウチノ海総合公園にも同様のスポーツ施設がありますが団体での利用者は少ないです。個人での利用者は多いです。ビーチバレーのコートが2面あり高頻度で使用されています。

(千葉委員)

既存施設の設備は現状を維持する。仮にビーチバレーを新アリーナに持ってくるとにぎわいが分散します。

(事務局)

既存施設の機能はそのまま生かしたいです。

(山中委員長)

スポーツ医学など、これまで主にプロの方々が利用してきたような設備やサービスに、一般の方々も触れることができる場があると良いと考えます。また、ヘルスケアの観点からも、スポーツ医学的な機能を持つ拠点となることも一つの方向性だと思います。

さらに、現地にレジデント、すなわち居住者がいるというのも興味深いアイデアだと感じています。例えば、そこに住んでいる方々がいて、訪れれば相談ができるような空間が形成されることも面白いのではない

かと考えます。このような場所にマンションを設けるという発想はあまり一般的ではありませんが、特定の方が住むレジデント機能を持たせることもアイデアです。公営住宅の中には、小さな商店と住居が一体となっているものもあります。そのような形で、若者が自ら管理しながら店舗を運営し、住みながらお店もできるような仕組みがあれば、出店のハードルも非常に低くなるのではないかと考えます。

(信江委員)

シテスポーツやヘルスケアは非常に良い着眼点であり、そういった要素は積極的に取り入れていくべきだと考えます。ただし、それらはまずにぎわいが生まれれば、さまざまな形にも展開できるものです。まずは、にぎわいを創出することを最優先に考える必要があり、基本的には、その場所の近くに人が住みたくなるような空間をつくることが重要だと考えます。

事例として、大阪市西区の靱公園を挙げます。もともと戦後まもない頃に、一時期占領軍の飛行場の滑走路だった場所が、現在は西半分がテニスセンター、東半分がバラ園などを備えた公園となっています。公園の中央には水辺が整備され、子どもたちが遊びたい、家族で訪れたいというニーズに応えています。その結果、靱公園周辺は、その近くに住みたい、暮らしたいと思う人が増えて人気の高いエリアとなり、マンションの建設も進んでいます。

このように、居心地の良さや滞在時間の長さを重視するのであれば、単に何か施設をつくるだけではなく、そこに居たくなる空間をつくるのが大切です。例えば、富山県の富岩運河環水公園も同様の考え方で整備されています。たとえば大阪城公園のように大阪城というキラーコンテンツがある場合は別ですが、そうでない場合は、空間自体を居心地の良い場所にし、そのうえでどのような機能を導入するかを検討することが大切です。居心地の良い場所には必ず多くの人が長く滞在したくなります。

これまでに、国土交通省も、都市公園の再生や活性化を図るため、都市公園法を改正し、Park-PFIなどの制度を通じて、さまざまな取り組みを進めています。新アリーナの予定地は都市公園ではありませんが、今は大阪・梅田のような一等地の高額な土地に、大きな公園を整備して人を集める時代です。つまり、居心地の良い場所をつくるができなければ、まちとしての競争力が低下する時代に入っていると言えます。

そうした意味でも、徳島県民や徳島を訪れる方にとって、滞在時間が長く過ごせるような居心地の良い空間をまず整備することが重要です。その空間の中にシテスポーツや各種センターなど、さまざまな機能を導入していくことが望ましいと考えます。

また、大阪府高槻市の安満遺跡公園は、弥生時代の遺跡を保存・活用した公園であり、主なターゲットの一つは小さなお子さんのいる家族です。高槻市は、周辺の自治体ではなく、高槻市に住んでもらうことを目的の一つとして、この公園を整備したと聞いています。このように、誰を呼び込むのかというターゲットを明確にし、その人たちにとって居心地の良い場所をつくることが非常に重要だと考えます。

日常使いについては、まず誰が訪れるのか、すなわちターゲットを明確にし、ペルソナをしっかり設定することが必要です。試合日やコンサートなどのイベント時とは切り分けて、日常使いでは誰に来てもらい、どのように過ごしてもらうのか、ターゲットやペルソナを具体化することが重要だと考えます。

(長井委員)

その視点は非常に重要であり、議論の出発点であると考えます。来場者ジャーニー、すなわち来場者

がどのような属性の方々と、どのような経路で来場されるのかを分類・分析することが必要です。まずは、今ご指摘いただいた内容が優先されるべきだと思います。この点については、検討委員会で議論するか、あるいは別途分科会を設けるのか、または研究機関と連携しながら進めるのか、さまざまな方法が考えられます。こうした取り組みを通じて、多様な可能性や新たなポテンシャルが見えてくるものと考えます。

（山中委員長）

徳島市末広というエリアは、大型商業施設が開業した時期からマンションが建設され、子育て世代が集まる場所となりました。この商業施設ができたことにより、そうした世代の方々が集まるエリアになったと考えています。

新アリーナは末広からやや離れた場所に位置していますが、マンションが次々と建設されたのは約 20 年前のことであり、年齢層は上がっている可能性があります。また、子どもの数も減少しており、公園利用も大きく落ち込んでいる状況です。そのため、今後どのような居心地の良さを地域の皆さんが求めているのか、改めて検討する必要があると考えます。各地でオープンな空間を活用しようとする取り組みが行われていますが、なかなかうまくいっていないのが実情です。やはり、住民の移動が進んでいるという印象が強いです。

ご指摘のとおり、オープンな空間を整備してにぎわいを創出することは、私自身も本来目指したい方向性です。現在、駅前通りなど街中でもそのような取り組みが進められていますので、今後は周辺地域とのつながりや、アリーナ周辺の空間づくりにも工夫が必要だと考えています。ぜひ、そうした新たな取り組みにもチャレンジできればと思います。

（事務局）

さまざまなご意見をいただき、ありがとうございます。基本計画を策定する上では、目的からしっかりとブレイクダウンしていくことが非常に重要であると考えています。

先ほど簡単にご説明した県都のグランドデザインの中で、アリーナについては「にぎわい拠点」という漠然としたイメージであったため、どのようなにぎわいを創出するかという点が議論の中心になったと思います。交流人口の増加を目指し、県外からの流入人口を増やすことや、県民の活動利用を促進することによって、しっかりとにぎわいを生み出していきたいと考えています。これまでの議論の中では、規模や機能について、プロスポーツの試合やエンターテインメント、県民のスポーツ利用などが挙げられていました。これらの要素から逸脱しない形で、ターゲットを明確にし、段階的にブレイクダウンして進めていくことが重要だと考えています。

もちろん、プロスポーツの利用だけでは年間 60 日程度に限られます。それ以外の日について、どのような方をターゲットにしていくのか、例えば子育て世代や若い世代、健康・ヘルスケア、徳島ならではのコンテンツやスポーツ医学など、さまざまなご意見をいただいています。徳島県としてどのようなターゲットを設定するかをブレイクダウンしつつ、他県の先行事例ではアリーナをどのように 365 日活用しているかも参考にしながら、どこまで具体化できるかを検討していきたいと考えています。引き続きご意見をいただければ幸いです。

関連して、前回臼木委員から「若い世代がどのような場所に行きたいと考えているか」といったご質問があり、個別にヒアリングを実施しましたので、その内容をご紹介します。高校生や大学生につい

ては、自転車による移動が主であり、行動範囲が限られている傾向が見受けられます。また、市内在住者だけでなく、市外から JR で徳島駅に来て、市内の高校や大学に通っている学生も多く、駅前周辺で過ごすパターンが多い印象を受けました。駅前には学習塾や、最近では自習スペースなどもあり、学生が集まる様子も見られます。さらに、駅前を拠点としてアリーナ建設予定地近隣の大型商業施設周辺まで自転車で移動する学生もいるようです。以前、信江委員からも学生の「サードプレイス」に関するご意見がありましたが、アリーナの計画地周辺には県立高校が数校所在していることから、自転車による行動範囲として計画地が選ばれる可能性もあると考えています。

また、県内の中高生におけるバスケットボールの競技人口についてもご報告いたします。人口減少が進む中で、スポーツに取り組む児童・生徒の数が減少傾向にあるのは事実です。しかしながら、県内で中学校・高等学校でバスケットボールをしている生徒、すなわち中体連や高体連に登録している生徒については、ここ 1～2 年でやや増加傾向が見られます。スポーツ教室や地域クラブ等の登録者数については、現時点で詳細な把握ができていませんが、これらも含めて考えると、バスケットボールをはじめとするインドアスポーツに関わる児童・生徒の増加も、今後の可能性として考えられるのではないかと認識しています。

（山中委員長）

周辺の高校生等の状況についてのご報告でした。

確認ですが、この敷地全体を活用するという方針で議論が進んでいるようですが、県としては、この点に関する進め方や調整方法について、何かお考えがありますか。

（事務局）

計画地は約 3ha あり、そのうち 3 分の 2 が市有地、残り 3 分の 1 が県有地です。現在、県と市が混在して土地を所有している状況のため、このままの状態を整備を進めることは難しいと考えています。アリーナの実現にあたっては、徳島市のご協力をいただきながら進めていく必要があります。徳島市からも、計画地の活用についてできる限り協力するとのご意向をいただいておりますので、本委員会での議論も踏まえつつ、計画地の活用について引き続き協議・調整を進めてまいりたいと考えています。

（山中委員長）

それではここでは所有者に関係なく議論を進めます。

（信江委員）

近隣の大型商業施設には、年間およそ 700 万人が来場していると聞いています。仮にその半数がこの場所に立ち寄れば約 350 万人、4 分の 1 でも約 175 万人となります。そのため、近隣の大型商業施設との連携はとても重要です。

もちろん、実際にどの程度の人が訪れるかは別途検討が必要ですが、多くの方がわざわざ足を運びたいような施設や仕組みを検討することで、日常利用のイメージが、より具体的に共有できるのではないかと考えます。

（長井委員）

近隣住民の方々に対して、ヒアリング等のご意見を伺うような取り組みは実施されていますか。今後、何らかの施設が整備されることが明らかになった際に、住民の皆様がどのような反応やご理解を示されるの

かについても、確認しておきたいと考えます。

（事務局）

現段階では、直接住民の方々のお声を伺ってはいない状況ですが、今後基本計画を策定するにあたっては、住民の皆様に対して、この資料の中で課題として挙げているような点について説明し、ご理解をいただくための取り組みが必要であると考えています。そのため、こうした取り組みも検討して参りたいと考えています。

（長井委員）

仮に 1 万人規模の集客が見込まれるイベントを開催した場合、県外からのお客さんも多くなると考えられます。その際、現状における宿泊施設の収容能力については、どのような状況ですか。

（事務局）

市内の宿泊施設の収容人数は、現在およそ 7,000 人程度ではないかと考えられます。計画地エリアではありませんが、先日アスティとくしまで大規模なコンサートが 2 日間開催された際には、徳島市内の宿泊施設はほぼ満室に近い状況だったと聞いています。また、先週末にも 2 日間で 10 万人を超える人出のイベントが開催されましたが、その際も市内の宿泊施設はほぼ満室となり、明らかにキャパシティを超えた状況だったと認識しています。

先日アスティとくしまで行われたコンサートの場合、3,000 席のうち約 7 割が県外からのお客さんだったと伺っています。大阪からの場合は日帰りで帰ることができます。

（山中委員長）

「4 整備・管理運営手法の考え方」について、官民連携手法などご意見をお願いします。

（吉長委員）

アリーナの整備にあたりましては、新しい環境のもとで柔軟な整備手法の開発に取り組む機会としていただきたいと考えております。例えば、プロジェクトファイナンスの観点で、「アリーナパーク」という名称について、パークという言葉の意味を考える必要があります。動物園は動物公園、植物園は植物公園と呼ばれるように、都市公園法に基づいて行政や国の助成金等との関係で、公園として整理されているのだと思います。博物館法に基づく施設であっても、公園として扱われる場合があるのではないかと推察しております。そのうえで、学校跡地を本当に公園として整備することが可能かどうか、検討が必要です。少し話が逸れますが、単なる呼称として「アリーナパーク」とする場合、メジャーリーグの球場では試合の 7 回裏が始まる前に、観客が立ち上がって体を伸ばし気分転換するために、7 回裏のストレッチ「7th inning stretch」と呼ばれる時間があり、曲が流れます。その歌詞に、“to the ballpark”（ボールパークへ行こう）という表現が出てきます。野球場のことをボールパークと呼称しています。日本の行政調達において「パーク」という言葉がどのように使われるかによって、調達方法にも影響が出る可能性があると考えています。

また、現在土地は市や県の所有となっておりますが、不動産の価値をどのように運用するかによって、整備手法が大きく変わると感じています。例えば、広島市の計画では、市長や知事が好意的にシェアファンドを行っていましたが、土地自体は JR が所有する民有地です。今回のケースは公有地であり、調達方

法が大きく異なると考えられます。

建物を整備するには、県と市が連携して新しい手法を導入する必要があり、管理運営については SPC や民間による運営が想定されます。しかし、所有者が公共である場合、例えば PFI で BTO 方式により建設した場合、所有権は公共に帰属します。私自身、長年 PFI 事業に携わってきましたが、イギリスの事例では BTO 方式はほとんど採用されていません。建物の所有者が誰になるかによって、固定資産税の負担者が変わるため、公共が所有する場合は民間が負担しなくて済むことになります。このように PFI には多様な手法があり、整備手法もさらに細分化される可能性があります。

土地が公的なものであることから、空港などで採用されているコンセッション方式がアリーナ運営に近いのではないかと推測しています。時間的な余裕がある場合、先日ご案内したように、アリーナでの適用例はありませんが、LABV (Local Asset Backed Vehicle) のような新しい第三のセクター方式も検討できるかもしれません。官民共同で新たな組織体を立ち上げ、現物支給によるアセット運用など、資金負担のない方法も考えられます。今後、こうした点も踏まえて検討していただきたいと考えております。以上が、第 2 回委員会後のヒアリングを踏まえた私の意見です。

(山中委員長)

山陽小野田の事例を見に行きました。公共が公有地を拠出し、民間が上物を建て、公共部分はリースをしているケースであると理解しています。

(吉長委員)

山陽小野田の LAVB 事例は複合施設となっており、大学の寮や市役所の支所、さらには地銀の支店などが一緒に入っています。今後は、1 ヶ所だけでなく、2 ヶ所、3 ヶ所と続いていく予定であり、まちづくり全体の発想に基づいて進められています。

言葉としては新しい手法で LABV があります。にぎわいについて、民間事業者を調達するには、要求水準書を作成します。その際、KPI は例えば年間何人集客するかなど、具体的な数値目標を設定し、Park-PFI などの調達を行っています。この委員会でも「にぎわい」をどの程度定義する必要があるのか、検討が必要です。にぎわい創出は行政用語として定着しており、ハコ物を作る際や公園整備の際には「にぎわい創出」と言えば、民間事業者が様々な提案をします。その中で、行政が良いアイデアを調達するという手法を取っていますが、民間の提案をそのまま鵜呑みにするのはリスクが高いと考えています。

前回の「2 アリーナの担うべき役割・社会的価値・経済的価値」に関する報告部分では、信江委員が社会的価値の定量化について調査方法や、リターンについてご意見をいただきました。もし今回、公共と民間で整備を進めるのであれば、社会的価値と経済的価値は KPI として非常に出しやすいと思います。今年の健康についても、例えば国保データベースを活用すれば評価が可能です。新アリーナを利用される市民や県民の方々が何を求めて来ているかというと、機能的価値と情緒的価値ではないかと考えています。パシエントジャーニー(患者体験プロセス)を見ても、サービス業は特に情緒的価値を重視しています。

我々の行動を品詞で表すと、ものを買に行くといい名詞的な行動、スポーツをするという動詞的な行動、さらに「可愛い」「ブランド」といった形容詞的な消費をしてきました。次に、行動経済学的にどのような消費が求められるかというと、“推し活”のような副詞的消費、つまりウェルビーイングや動詞を修飾するよう

な消費を掴む必要になってくるのではないかと考えています。

私の個人的な意見ですが、平日に集客する必要は必ずしもないと考えています。休むことも大切です。完全に休むということではありませんが、メリハリをつけて、名詞、動詞、形容詞の消費性向の次に何があるかを考え、運営者がイベントを仕掛けた際に、どのようににぎわい創出につなげるかを淡々と狙っていく方法がないか、自問自答しているところです。

（千葉委員）

意外と平日はそれほど空いているわけではありません。加えて、県の施設となると、全国大会や中四国大会、四国大会、県レベルの大会や競技スポーツなど、さまざまなイベントが開催されており、これらも担っていく必要があります。本当に部活動の受け入れが可能かどうかについても検討が必要です。その点については、区別を明確にし、メリハリのある新たな機能をこの施設に生み出す必要があると考えます。既存の機能をすべてこの場所に集約したとしても、必ずしも魅力的なものや場所になるとは限りません。そういった観点から、今後議論を深めていく必要があると思います。

（事務局）

実際に私たちもいくつかの施設を視察しますと、大きな総合公園の新しいアリーナは既存体育館に隣接しているケースが多く見受けられます。平日でも駐車場には多くの車が停まっており、利用者が多い印象を受けますが、みなさん古い既存体育館に入って行かれます。つまり、日常的に体育館を利用される方々は、従来の施設を主に利用しているという状況です。

なぜ新しいアリーナを利用しないのかというと、表向きにはイベントの予定が入っていないように見えても、前日の撤収作業や次のイベントの準備、あるいは自治体の行事などで実際には埋まっていることが多いからです。そのため、ご指摘いただいたように、従来の機能を過剰に新しい施設に盛り込めば平日のにぎわいが生まれるかという、実際にはそれほど余裕がないというのが現状であり、難しい部分だと認識しています。

（千葉委員）

公共性の役割について、何かを「する」場所としての機能だけでなく、そこで「みる」「体験する」といった新たな共有価値や、先ほど話題に上がったインタラクティブな新しい価値、すなわち参加型のイベントなども重要ではないかと考えます。こうした点は、県や行政としても新たな役割を担うことになるのではないのでしょうか。もし何かを「する」場所だけであれば、従来の施設と同じで十分ということになります。

（山中委員長）

2つの観点で考える必要があると思います。メインアリーナがそのような状態である場合、それ以外の部分にどのような機能を持たせるかによって、平日の利用方法も変わってくると考えます。

（千葉委員）

B.LEAGUE PREMIER の新シーズンが開幕しますが、平日開催が増える予定です。したがって、徳島ガンバロウズが将来的に B.LEAGUE PREMIER に昇格した場合、平日開催の割合も増えていくことになります。週末については、アマチュアスポーツやさまざまなコンテンツを含めて、より多様な利用が想定されます。平日について月曜から金曜まで施設が空いているというイメージがありません。

(山中委員長)

メインアリーナが空いているとき、利用されていない時間帯に空間が閑散としてしまうイメージがあるため、にぎわい創出を求める傾向があります。一方で、運営上それで問題がなければ、必ずしもにぎわいを求める必要はないのではないかというご意見もありました。また、県としては新アリーナを生かして拠点性を持たせ、スポーツ以外の目的でも人が集まる場所にしたいという思いもあり、この2つの要素が議論に含まれていると感じます。毎日利用を促進する場合はそれに応じた機能を、また利用されない時間帯には別の機能を付加していく必要があると考えており、そうした観点から、この施設のコンセプトについてもかなり議論が深まってきていると思います。

(臼木委員)

アリーナについて、「する」場所ではなく「みる」場所として位置付けたいと考えています。プロスポーツやトップレベルのエンターテインメントに特化した施設とするのが適切であると考えます。

アリーナ以外のいわゆるパーク部分について、仮に候補地に新アリーナを設置する場合、例えば、5,000～7,000人規模のアリーナを整備した場合、その中でどのように活用するか、あるいは根本的ににぎわいを生み出すのであれば、むしろ大規模な公園を整備した方が良いのではないかという議論にもなり得ます。このように、本質とは異なる論点が混在してしまうため、そこは整理が必要だと考えます。私としては、アリーナ自体は「みる」場所として、トップスポーツやエンターテインメントが円滑に運用できる施設をしっかりと整備し、それ以外のパーク部分については別途整理して検討すべきだと考えています。

(山中委員長)

約1.5haほどの余剰地が生じますが、それをすべて駐車場として活用するか、全体を使ってパーク化、またはハブ化するかは議論が必要です。仮に1haを駐車場として利用した場合でも、約400台程度しか駐車できません。大型商業施設のように立体駐車場を整備すれば2,400台程度収容することも可能ですが、その分コストがかかるという課題があります。アリーナのために1,000台分の平面駐車場を整備することについては、必要性や効率性の観点から慎重に検討する必要があると考えます。

(事務局)

駐車場の台数について、大規模興行時には渋滞などの課題が生じることが想定されます。そのため、バランスを考慮する必要があると考えます。また、県内の他の事例では、大規模興行時には車での来場を控えていただく運用を行っているケースもあります。最低限必要な駐車台数については、市の附置義務条例に基づき、どの程度必要か、また関係者用の駐車場をどれだけ確保するかは当然検討しなければなりません。そのうえで、どの程度の駐車場を整備すべきか、またアリーナパークとしてどのような機能を持たせるかについては、全体のバランスを考慮しながら検討していく必要があると考えています。

(長井委員)

バランスについては、これが正解というものはないと考えています。まずは目的、すなわち「最終的にどうなっていることが望ましいのか」という観点から逆算して考えることが重要だと思います。敷地の広さなどを踏まえると、明確な正解があるわけではなく、ユーティリティ性、すなわち転用のしやすさや使い勝手の良さ、用途の使い分けのしやすさといった点が重要になるのではないかと、現地を拝見して感じました。あの場所で

何かに特化した形で決め打ちして整備してしまうと、20 年、30 年という長いスパンで見たときに、かえって柔軟な対応が難しくなり、将来的に制約が生じるのではないかと懸念しています。

（山中委員長）

建物のアイコン性も期待されていると思います。

（長井委員）

例えば、サグラダ・ファミリアのように、20 年、30 年後に完成するというような長期的な視点で段階的に整備していくというアプローチもあるのではないかと思います。

（臼木委員）

長井委員のご提案に個人的には賛同します。20 年後となればアスティとくしまも 50 年程度経過しており老朽化しています。

（長井委員）

それは重要な視点です。近隣施設との連携といってもそれぞれにライフストーリーがあります。

（千葉委員）

にぎわいの指標として、年間百万人や数十万人といった具体的な KPI を明確に設定することは非常に重要だと考えています。また、事業手法についても、こうした KPI の設定が課題解決につながるのではないかと感じています。

近年、PFI は主に公共工事で多く活用されてきましたが、最近では負担付き寄付やコンセッション方式など、さまざまな手法が出てきています。にぎわいを創出するためには、ビジネスとして成立させること、すなわちビジネス＝にぎわいの創出が必要であり、そのためには民間の知恵を活用することが重要です。PFI の BTO 方式では限界が見えてきていると、実際のプロジェクトを見ていて感じています。

また、PFI においても価格、設計、運営など様々なバランスが求められますが、現状では最も安い価格を提示した事業者が有利となり、他のチームが価格以外の要素で逆転するのは得点バランス上難しい状況です。今後は運営に重きを置き、運営者が責任を持って運営していく手法が望ましいと考えます。それによって地域のにぎわいが生まれるとともに、公共性をどのように担保していくかが、最近特に重要な課題となっていると感じています。

民設による負担付き寄付の場合でも、公共から予算が拠出されることになるため、公共としてはその拠出理由を明確にする必要があります。こうした公民連携のあり方も含めて検討していくことが重要です。

例えば、アーバンスポーツパークやボルダリングなど、今後ニーズが高まると考えられる分野については、民間事業者が非常に感度高く情報を収集しており、そうした付帯設備を新アリーナに導入する提案が数多く寄せられています。極端な例としては、「年間 200 万人が来場するような、スポーツを核とした施設の提案をしてください」と求めるイメージです。そこまで極端でなくとも、そうした議論の骨格をしっかりと定めていくことに、よりフォーカスしていただきたいと思います。

（山中委員長）

ご指摘の通り、スポーツ人口の増加や健康寿命の延伸といった点が、基本的な環境価値となっている

と考えます。正確な統計は把握しておりませんが、そうした価値に対して公的な負担をどの程度行うかが重要なポイントです。民設民営と記載されていますが、最終的には公民連携で事業を進めることが、この検討会の意義であると認識しています。もし完全に民間のみで事業が成立するのであれば、こうした議論は不要であると考えています。現在は、民間がどこまで事業のウエイトを担うかについて議論されているものと理解しています。少なくとも土地については公共の土地であり、その活用方法を検討していると認識しています。土地を売却するという話ではないと理解しております。

(吉長委員)

今後、民間事業者に対してマーケティングの一環としてサウンディング調査等を実施されることになると思いますが、その際、どのような手法を使いますか。例えば管理手法や調査手法などが妥当であるかについて、マーケットサウンディングを実施されることが望ましいと考えますが、いかがですか。

(事務局)

サウンディングの方法や内容については、あえて厳格に固めるつもりはありません。これまでの議論においても、事務局側が一方的に形を決めるようなことは意図的に行っておらず、サウンディングにおける民間の皆様のご意見に対して柔軟に対応できるようにしたいと考えています。

整備手法についても、吉長委員、千葉委員からご指摘いただいたとおり、従来型の PFI 方式など、一般的な手法では行き詰まり感があると認識しています。サウンディングの状況によっては、他自治体の施設整備でも見られるように、オーダーメイドに近い新たな手法や、従来型に新しいエッセンスを加えた手法が出てくる可能性があります。そうした点も具体的に検討していく必要があると考えており、今後も柔軟に対応していきたいと考えています。

(山中委員長)

いわゆる導入可能性調査についても、今回から実施を想定していただけると伺っております。

(長井委員)

サウンディング調査を実施するにあたっては、県からある程度のガイドラインを提示されると思いますが、そのガイドラインは、本検討委員会での議論を踏まえた内容になるという理解でよろしいですか。

(事務局)

その通りです。資料の基本フレームのところです。

今回の資料は、これまでの議論の概要を分かりやすく整理したものです。ここから大きく方向性が変わることはないと考えております。この方針をもとに、今後サウンディング調査へ進めていくことになる想定しています。

(山中委員長)

「5 アリーナ事業推進上の課題」の議論に移ります。既に多くのご意見をいただいておりますが、アクセス動線の整備や近隣住民の方々への理解の 2 点について、追加があればお聞かせください。

アクセスについて、まだ明確な方針が見えていません。徒歩の場合、現地まで約 40 分かかります。元気な方であれば歩けない距離ではありません。バスの場合、大規模なイベント時にバスを運行するとなる

と通常のバスでは対応が難しく、何らかの工夫が必要です。鉄道の導入も可能性としては考えられますが、現時点では具体的な計画はありません。

また、アクセスルートをより楽しいものにしていこうというご意見もいただいております。どのルートを歩くと楽しいかといった視点で現地を確認し、地域の方々と意見交換を行うことも重要だと考えています。

既存施設との役割分担について、施設はアスティとくしまとの関係になりますが、にぎわいの創出となると都市戦略の視点も必要です。現在、中心市街地や駅前地区も再整備が求められる時期に来ています。これらのエリアとの連携も視野に入れておかないと、取り残される可能性があるため、ぜひご検討いただきたいと思います。つまり、施設機能としてはアスティとくしまとの役割分担が議論の中心となりますが、にぎわいの創出という目的においては、中心部との関係性を十分に考慮していただきたいと考えています。

さらに、駅前のビルの活用についても議論が出ております。それも含めて駅周辺地域の機能について整理しておく必要があると感じています。新アリーナの役割とは直接関係しませんが、都市戦略の観点からもぜひご検討いただきたいと思います。

（臼木委員）

徳島ガンバロウズとしては、当然ながら駐車場が大きい方が望ましいと考えています。しかし、にぎわいの創出や経済波及効果を重視し、今後の展開のしやすさという観点から、ある程度の余剰スペースを確保することが望ましいと仮定した場合、思い切って駐車場を設けないというパターンも検討の余地があるのではないかと思います。その場合、駅からのバス利用が大幅に増加することが予想され、県全体のにぎわいという意味では、経済効果もより大きくなると考えられます。さらに、例えば大型商業施設に立ち寄ってから帰るなど、ある種の不便さが新たな効果を生み出すことも期待できます。必ずしも利便性を最優先するのではなく、不便な場所であっても現地まで足を運ぶのであれば、来場者は「せっかく来たのだから、もう少し何かしてから帰ろう」という心理になるのではないかと考えます。そのような仕組みを意図的に取り入れることも選択肢の一つであると、改めて感じました。

（山中委員長）

現状、アスティとくしまで試合が開催された場合、来場者の方々はどのようなアクセス方法を利用されているのですか。

（臼木委員）

アスティとくしまであれば、県民の皆様はアクセスに慣れており、周辺の駐車場に分散して駐車して来場されている印象があります。バスについては3台運行していますが、利用者は少なく、多くても300人程度です。意外と公共交通機関の利用や、秋田町エリアの駐車場から徒歩で来場される方もいます。

（山中委員長）

アスティとくしまの駐車場のキャパシティは534台で前払い方式です。早めに行かないと入るのが大変な駐車場です。

乗り合わせて行けば、ある程度の人数が対応できるということで理解しました。

（臼木委員）

帰りの混雑を見越して歩いた方が早いからと、あえて近くではなく秋田町エリアに停めてくる人は少なくあ

りません。

(山中委員長)

近隣に駐車場が少ないということもありますが、あえてそういった行動になる可能性があるということで、理解しました。

(事務局)

アクセスや駐車場については、現時点で事務局として明確な答えを持っているわけではありません。課題として認識しつつ、今後サウンディング調査をしっかりと行い、さまざまなアプローチがないか検討していきたいと考えています。委員の皆様からいただいたご意見も十分に踏まえたくて、今後の対応を進めます。

(千葉委員)

郊外型のアリーナの場合、アクセスの課題は避けて通れません。しかし、新たに鉄道を敷設したり、特別なモビリティを用意したりすると、非常に大きなコストがかかってしまいます。最近良いと感じているのは、ライドシェアの仕組みです。自動車だけでなく、電動アシスト自転車のライドシェアをうまく活用している事例も見受けられるようになりました。例えば、シアトルやヨーロッパではこの分野が非常に進んでおり、行政側による道路整備などのインフラ整備が重要な役割を果たしています。自転車だけを用意しても、インフラが整っていないと十分に活用できません。

県都のランドデザインにおいても、回遊性をどのように高めるかが重要な課題です。既存のコミュニティだけで解決を図るのではなく、新しいモビリティの導入を、今後5年先を見据えた施設整備の中で検討しても良いのではないかと考えています。5年、6年先を見据えれば、主要な交通インフラや道路整備も計画的に進めることが可能です。そうすることで、万代町などさまざまなエリアがつながり、周辺には川も多いことから、小型の乗り物をみんなでシェアする発想は、流動性を高めるうえで非常に大きなインパクトがあるのではないかと思います。

(牛尾委員)

ペルソナの設定が非常に重要だと考えています。住みたいまちを目指す場合、私自身も徳島県民として、南・西・北の地域の方々がアリーナの整備によって、その地域が居心地の良い場所と感じ、住みたいと思えるようなまちづくりが必要だと感じます。また、県外の方も訪れるとなると、行政としてアリーナ周辺に人が集まることを想定し、対応を検討する必要があると考えています。県のアリーナとなる以上、各地域の方々も納得できる、本当の意味でのまちづくりが求められます。その点についても、ペルソナの設定が重要な役割を果たすのではないかと感じています。

(山中委員長)

南からのアクセスが広がることについて、どう考えるかは検討が必要です。

(事務局)

本日はさまざまなご議論をいただき、ありがとうございました。委員の皆様から頂戴したご意見を踏まえ、今後、事務局においてサウンディングに向けた取りまとめを進めてまいります。また、サウンディング調査の進め方につきましても、実施前にご意見をいただければと考えておりますので、引き続きご協力のほどよろしく

お願いいたします。

(山中委員長)

ありがとうございました。

それでは、司会を事務局にお返しいたします。

(事務局)

山中委員長ありがとうございました。

これをもちまして、第3回アリーナ基本計画検討委員会を閉会いたします。本日は、ありがとうございました。

以上